新宿山吹だより

都立新宿山吹高等学校通信
令和３年度第12号
【令和４年３月７日】

新宿山吹だよりは、保護者の皆さんにも読んでもらって下さい。

「東日本大震災を忘れない」

校　長　永浜　裕之

東日本大震災発災から11年が過ぎました。平成23年3月11日は、被災地から遠く離れた東京でさえ交通機関がストップして、都立学校では、約8,500名の児童・生徒を学校で保護しました。電話が繋がりにくくなり、保護者と学校との連絡が著しく困難になりました。発災から10年の節目を超えた今年、コロナ禍ということもあり、多くの追悼行事が中止・縮小されましたが、私たちはこの大災害を風化させてはなりません。

令和2年度の「新宿山吹だより第13号」では、「３．１１を忘れない（釜石の奇跡）」と題してこの災害を振り返りました。今年は、発災当時の新聞に掲載された示唆に富む記事を２つ紹介します。

これから出動するよーー被爆の危険が待ち受ける原発事故現場の放水作業に向かうとき、東京消防庁の総隊長（58）は妻にメールした。１行の返事が来た。「日本の救世主になってください」。夫が身を捨てて救世主になることを望む妻は、いない。

しかし、心配していると告げれば、夫の覚悟が鈍る。ドーンと背中を叩いた１行のメールの向こうに、神仏に合掌してすすり泣く人の姿が透けて見える。意は深くーー。

「崇高」という言葉は知っていた。意味するところを、いまにして知る。

2011.3.22　読売新聞「編集手帳」

震災から３日後の３月14日夕方、竹谷信宏さん（25）＝現巡査＝を含む４１人の宮城県警察学校生に、教官から思いもよらぬ命令が下された。「明日から検視の仕事を手伝ってもらう」。警察学校生たちはそれまで、宮城県名取市の高台にある警察学校に避難してきた人の世話などに当たっていた。

竹谷さんは「警察官になった以上、遺体と接することは覚悟していたが、まさかこんなに早くとは…。『遺体はどんな状態なのだろうか』『苦しそうな表情をしているのだろうか』。前日の夜は恐怖心で眠れなかった。

翌日、収容所でいきなり言葉を失った。最初に対峙した遺体はまだ６～７歳の女の子。悲しみを通り越してしまうほどの衝撃を受けた。黙々と水でぬらしたタオルで体と髪に付いた泥を拭った。竹谷さんとペアを組んだ警察学校生の女性は涙をこぼしていた。

検視の手伝いは約半月続き、70～80人の遺体をきれいにした。

中でも竹谷さんのまぶたに焼き付いている光景がある。仕事中に声をかけられ振り向くと、放心状態の女性がたたずんでいた。両腕に３～４歳くらいの男の子の遺体を抱えていた。「息子なんです。きれいにしていただけませんか」。

やり場のない悔しさを感じながら、少しでもきれいにしてあげようと丁寧に体を拭き、納棺師に引き渡した。このとき、警察官の仕事の重さと奥深さを感じたという。

子供のころに警察車両の展示会で「かっこいい」と思って以来、ずっと警察官に憧れ続けた竹谷さん。地元の大学を出て、一度は神奈川県警の試験に合格したものの、「どうしても地元の治安を守りたい」と宮城県警の試験を受け続けたという。

３月末、警察学校を卒業。岩沼署地域課増田交番に配置された。岩沼署は今回の震災で計６人が殉職するほどの被害が大きい地域だ。朝７時に出勤し、明るいうちは不明者の捜索、夜はパトロール、翌日昼過ぎに寮に帰って寝て、また翌朝７時に出勤という過酷な毎日が続く。

休日はこれまで１日もなく、体力は限界を超えている。それでも、「住民の方から『ごくろうさま』『ありがとう』といわれると力が沸いてくる」。いつ町が元の姿に戻るのか、想像もつかないが、「とにかくやるしかない。一人でも多くの不明者を見つけたい」とがれきに立ち向かっている。

2011.５.１　産経新聞

ウクライナへの想い

校長　永浜　裕之

政治的な問題に深入りすることを避けつつ、ロシアのウクライナ侵攻の思想的な背景について書きます。生徒の皆さんは、書かれた内容を鵜呑みにすることなく、クリティカルリーディングを心がけてください。また、様々な報道に触れて、自分の意見を持ってほしいと考えます。

ロシアのウクライナ侵攻は、ＮＡＴＯ（北大西洋条約機構）の東方拡大への反発という、ロシアの国家としてのアイデンティティーが理由の一つに挙げられています。1991年12月25日、ソビエト社会主義共和国連邦ゴルバチョフ大統領の辞任に伴い、ロシア連邦成立とともに、ソビエト連邦を構成した国々は、それぞれが独立国となりました。ソ連崩壊により共産主義という大義が失われ、プーチン氏は国家的アイデンティティーの拠り所に「新ユーラシア主義」を掲げています。この思想は、ロシアを、ヨーロッパでもアジアでもない独自の存在と定義し、ロシアを中心とした文明圏の再構築を目指しています。この思想では、旧ソ連に属していたロシアとウクライナは兄弟国であり、ロシアにとって、ウクライナのＮＡＴＯ加盟は絶対に認められないこととなります。

プーチン氏は、アメリカやＮＡＴＯが強い態度に出てこないことを確信し、ウクライナの欧州接近を阻止する千載一遇のチャンスと捉え、無謀な試みに出ました。ウクライナを失うことがロシアのアイデンティティーの崩壊や、自らの政治基盤の崩壊につながると思い込んでいるようにも見えます。

週末、何冊かの既読書物を再読し、あらためて驚いたことがあります。

2014年に開催されたソチ五輪閉会式の日にウクライナで政変が起こり、親ロシア派の政権が崩壊し、ヤヌコビッチ大統領は亡命します。その後、ロシアによるウクライナ南部のクリミ占領が起こりますが、このことに対するゴルバチョフ氏へのインタビューで彼は、「クリミア住民がロシアを選んだのだから、その正当性は一概に否定できない」と述べています。また、「ＮＡＴＯの東方不拡大について文書で約束しなかったことを悔やんでいる」とも語っていました。

欧米と関係改善を図り、冷戦を終わらせた立役者であり、ノーベル平和賞を受賞したゴルバチョフ氏でさえ、このような考え方をもつことに、あらためて驚愕を感じました。

ソ連崩壊後、欧米の自由と民主主義の波はロシアにも及んでいます。

しかし、古来よりロシアには、「個人の自由は社会全体の安定があってようやく保たれる」という考え方が根付いています。ロシアの小説家・思想家の「ドストエフスキー」は、「我が国は無制限の君主制だ。だからおそらく、どの国よりも自由だ」と、逆説的に説明しています。

「絶対的な権力が失われれば、社会の秩序が保たれない」と恐れるロシア人は、西側の国々の価値観に対抗するためだけではなく、自らを律するために強大な権力を求めていると言えそうです。そのためか、強大な権力者であるプーチン氏の異常な決定に対して、彼の側近たちが異を唱えているという報道もないし、ロシア市民の多くが望んでいない戦争が行われようとも、反対のうねりはそれほど大きくなってはいません。

とはいえ、今回の侵攻はロシア人の同胞同士で殺しあうようなものであり、第２次世界大戦の悲惨な体験を共有する市民は、この事態を望んでいないはずです。

ロシアの作家グロスマンは、ロシア人の国民性を「千年の奴隷」と表現しています。

ロシア人の心の中には、「永遠の神の王国は歴史の終わりに現れる」という黙示録的な願望があり、そのことが、政治の現状に対する無関心を助長しているとしています。ゆえに、西側諸国の価値観を理解して同調してもやがて反発する心情が生まれ、再び権力に隷従した状態に戻ってしまう、このことをグロスマンは「千年の奴隷」と呼んでいます。

このように考えると、現在の状況はロシアの世界観が背景にあるだけに、外部からの働きかけで解決することは難しい点がありそうです。とはいえ、戦争の悲惨さは目に余ります。ロシアが古い概念から抜け出し、和解の道に進むことを心から願っています。

定時制課程　学校行事予定	**通信制課程　学校行事予定**
３月13日（日）新入生履修登録	３月12日（土）学校説明会
24日（木）卒業式	19日（土）生徒相談日
26日（土）２学年相当以上、転学・編入学入学者選抜	24日（木）卒業式
	４月４日（月）入学者選抜